文化庁月報

No.491
平成21年 8 月号

CONTENTS

文化の交差点 青木 保・文化庁長官座談会 第25回 ゲスト 鷲田清一さん●大阪大学総長／
桐竹勘十郎さん●文楽人形遣い／平田オリザさん●劇作家・演出家，大阪大学教授

カフェ・アオキ in 大阪 都市と文化 文化力で関西「から」「を」元気に（前編）…… 4

特集 登録記念物

解説

登録記念物制度の概要 ……文化財部記念物課・11

当面重点を置いて登録を行う記念物 ……文化財部記念物課・17

事例紹介

「立山砂防」を支える基幹動脈 ……島田修一・20

松代城下町の庭園と泉水路 ……宿野隆史・22

八百年の甘みを伝える禅寺丸柿 ……小野木文一・24

特別寄稿

日本に出会う旅……久保 修・26

連 載

鑑 文化芸術へのいざない 8・9・10

装飾料紙あれこれ（池田 寿）……28

平常展「日本美術の流れ 縄文から近代まで」（加島 勝）…30

子どもとともに，学び，楽しむ（今井陽子）……34

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 89

宇都宮美術館（栃木県）……36

こどもの文化体験 29

中学生のための演劇ワークショップ
（世田谷パブリックシアター）……37

日本の伝統美と技を守る人々 重要無形文化財保持者編 31

岸本欣一（竹本住大夫・人形浄瑠璃文楽太夫）……38

文化交流使の活動報告 57

茶道とタイ文化の融合（茶道家・ブーイ 文子）……39

伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 63

離島の港町（長崎県平戸市大島村神浦）……40

文化庁ニュース

文化芸術創造都市のとりくみ

フェスティバル／トーキョーの誕生 ……42

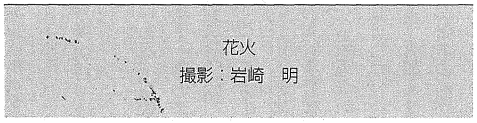
イベント案内● 43

新国立劇場スポットライト● 45

9月の国立劇場● 46

芸術文化振興基金ニュース● 47

今月の表紙



花火
撮影：岩崎 明

カフェ・アオキ in 大阪

都市と文化

文化力で関西「から」「を」元気に

（前編）人形浄瑠璃文楽の実演・解説

金水 本日は、多数の皆様にお越しいただきありがとうございます。

まず最初に、この場所と、「ラボカフェ」について説明させていただきます。

ここは大阪の中心部の中之島にある、京阪電車中之島線「なにわ橋駅」の地下一階のスペースです。ここを京阪電車様と大阪大学、そしてNPOのダンスボックス、この三者の協同によるプロデュースのもと、アートと知識が交流する場所として、「アートエリアB1（ビーワン）」が昨年一〇月の京阪電車中之島線の開業とともにオープンしました。

特に「ラボカフェ」と名づけて、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターのプロデュースにより、大学の知識をこの駅の空間の中で、皆さんと一緒にカフェ形式で語り合い、楽しんでいこうという趣旨のイベントを、このスペースで展開してまいりました。

本日は、この「ラボカフェ」のスペシャルバージョンとして、「カフェ・アオキ in 大阪」を始めたいと思いますが、まず最初に、ゲストでお越しの文楽人形遣いの桐竹勘十郎様に、実際に文楽の人形を遣う様子を皆さんにご覧いただこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

桐竹 文楽で人形を遣っております人形遣いの桐竹勘十郎と申します。

僕も京阪電車はいつも乗るのですが、中之島線は今日が初めてで、こういうスペースがあるというのも初めて知りました。今日はここで「カフェ・アオキ」を開催するということで、お話に入る前に文楽の人形をちょっとご覧いただきたいと思います。

私たちは人形遣いでございまして、人形を遣うだけなんですけども、私たちだけではお芝居はできません。物語を語ります太夫、そして、隣で演奏いたします三味線弾き、この太夫と三味線弾きが作る世界がございまして、これを「浄瑠璃」と申します。

浄瑠璃には、新内とか清元とか常磐津などたくさんありまして、みんな下に「節」がつくんですね。「新内節」など。「節」がつく、つまり語り物です。物語を語って聞かせるということです。同じ三味線という楽器をつかいますけども、長唄とか小唄とか端唄、それらは唄でございまして、大きく違いますのは、唄か、語り物である節であるかです。

その浄瑠璃の一つが「義太夫節」です。これはもう名前のとおり、竹本義太夫という方が、それまでの古い浄瑠璃を自分流に作り直して、新しい浄瑠璃といいますか、自分流のものを作りはったんですね。非常に声が大きな美声家だったそうでございますけども、この竹本義太夫が作った浄瑠璃で物語がどんどんと展開してまいります。

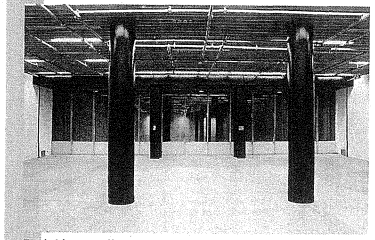
そこで動くのがこの人形です。これは「赤姫」と呼ばれる人形です。私たちが「三人遣い」と呼んでおります人形なんですけども、この三人遣いができましたのが、今から二七〇年ほど前の、一七三四年とされております。場所は大阪の道頓堀。今も賑やかでございますけども、昔は芝居町でございます。立派な芝居小屋がたくさん並んでおりまして、竹本義太夫さんの竹本座というのもそこにあったわけですね。竹本座といいますのは、一六八四年に竹本義太夫が作った人形浄瑠璃の小屋でございます。戎橋を南側に渡った道頓堀にあるんです。今、「竹本座跡」という石碑がちゃんと建っておるんですけども、ここが非常に浄瑠璃が盛んなところでございました。

ここで一七三四年に三人遣いが始まったんですね。それまでは小さな人形で、すそから手を入れまして、人間は姿を見せずに最初は遣っておりました。で、だんだん遣う人形遣いの姿も見せるようになってきたんですけども、そこで一人遣いを三人で遣おうという工夫がされました。大変すばらしい発明といいますか工夫やったと思います。一つの人形を三人で、今からちょっとそれをやってみたいと思いますけども、当時とまったく同じ遣い方を今もいたしております。

まず、この「かしら」ですね。かしらというのは顔のことなんですね。「首」と書いて「かしら」と呼んでおりますけども、今ご覧のように簡単に抜けるわけです。左手で持っておりまして、それぞれ指がいろんな動きをするんですけども、一番肝心な指がこの中指ですね。中指にかかっているのが「うなずく」仕掛けなんです。緩めると顔が下に向いて、引くと上を向く。これでうなずくと。顔の表情が変わる仕掛けも、そういうのがつけてあります。

この「かしら」は、ひのきでできておりまして、髪の毛も、人間の女性の髪の毛、またはチベットのヤクという動物の毛を使いまし

なにわ橋駅　地上出入口


駅内地下１階にあるアートエリアB1（ビーワン）

今回の座談会は，６月４日に文化力プロジェクト「関西元気文化圏」のトークイベント「カフェ・アオキ in 大阪」として行われたものです。「文化庁長官」の肩書等は開催時のものです。

て、それを床山さんが役柄に合わせてきれいに結い上げてくれるわけですね。

さらに申し上げれば、人形ごしらえというのがありまして、土台に衣装を着せていく。これは人形遣いが全部するんですけども、舞台稽古の前日に全部この人形をこしらえていきます。これも昔と変わっておりません。で、千秋楽になるとまたバラバラにしてしまうわけですね。その人形はそのお芝居のために作るということです。

話は戻りますが、この「かしら」をどうやって持つかと言いますと、この帯の後ろに穴があいております。この帯の下の穴から左手を入れまして、人形を持つ。それで左手だけで人形を全部支えられるわけですね。そして、右手で人形の右の手を持ちます。

これで、「かしら」（顔）と右手を一人で遣います。この遣い手を「主〈おも〉遣い」といいます。

あと二人つくわけですけども、まず両足を遣います「足遣い」。両手で両方の足を遣います。

それともう一人「左遣い」ですね。左遣いは右手で人形の左手を持っております。

主遣い、左遣い、そして足遣い。これが三人遣いということですね。この三人で息を合わせて一つの人形を生きているように見せるということでございます。

足なんですけども、女形、つまり女性の役で、すそを長く引いている役は、足がございません。はい、ちょっと恥ずかしいですけども、すそをめくって中をご覧いただくと、人の指先が見えておりますね。足遣いの指先ですけども、この指と、腕全体を使いまして、足の動き・形をつけます。右、左、右、左とすそが動いておりますね、中で足遣いが衣装をうまく遣って、歩いているように見せるということです。

何かにつまずきますと、立てひざといいまして、ひざを立てて、ああ危なかった、危なかった、くっと見るとちゃんとひざができていますね。これも手なんです。握りこぶしですね。握りこぶしでひざの形にする。うまく

できております。

こうしますと、女形のやさしい足の動きが表現できるわけですね。小さな足を使うこともあるんですけども、すそを引いている場合は足をつけずに、手で足の動き・形をつけるということでございます。

それから、遣い方ですね。急にこう動かしても、ちゃんと私のほしいところに人形の左手が出てきます。これは、なぜ出てくるんでしょうね。例えば帯を締めます、こういう動きが全部左遣いに伝わっているんですね。これは、合図が出ております。どことは言い難いんですけども、この後頭部、そして両方の肩とか背中の動き、ここが合図になっていて左遣いの人が見ていてくれるんですね。合図がないと人形の手が出ないんです。やはり左遣いに準備をしてもらう間と、そして空間ですね、この二つを作る。それで初めて手が出るんですね。ちょっとめんどうくさいんですけどもね、ゆったりとした動きになりますけども、これが人形の独特の動きになっているわけですね。

あと目線です。目線をつける。これも難しいですね。目をちゃんと手とつけて合わせて遣わないと、ちょっと離れてしまうとどこをさしているかわからないですね。必ず目と手をつけて遣う。こういうことに気をつけて遣っております。

それから、手はひもで吊ってあるだけなんですね。これを、中にはちゃんと骨がありますよ、関節がありますよというふうに遣わないと、これはたるんでしまうとおかしいですね。たるまないように、骨でつながっております、肩の関節があります、ちゃんとひじもあります、こういうふうに意識をして遣わないと、変な形になってしまうんですね。

ではちょっと表情をやってみます。笑います。ほほほほほほほほほほほほ。お姫さんですので、普通はあまりこう動かさないですけども、いくらでも動くんですよ。ほほほほほほほほっていくらでも動くんですけども、やはりお姫さんはお姫さんの動きをするということですね。

恥ずかしいときには顔を隠すんですけども、これもやはりお姫さんですので、ちょっとしとやかに。誰かこう相手の顔を見まして、顔をこう隠す。

泣きます。泣くときも、悲しい気持ちになって、するとしゃくり上げる。涙が出てき

ますので、涙を拭きます。こういうふうな動きもできます。

ではご挨拶を。えりを直しまして、どうもありがとうございました。

こういう具合に、三人が息を合わせて、一つの人形を遣う。すばらしい発明でございますけども、ただ修業はかなり長くかかります。足遣いが、全部、いろんな足の動きができるようになるまで修業するには、一〇年、一五年とかかるわけですね。そしてまた左遣いの勉強もするということで、かなり時間はかかるんですけども、息が合いまして、本当に生きているように動かせるようになると本当に楽しいものでございます。お若い方で、私もやってみようという方は、ぜひ人形遣いに。ただ、男性しかだめなんです。すいません。二四、五歳までございましたら受けつけておりますので、人形遣いになりたいという方は、ぜひ、国立文楽劇場まで申し出ていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

金水　それでは、「カフェ・アオキ」の説明も兼ねまして、まず青木長官からお願いします。

青木　金水先生、大変貴重なお話をありがとうございます。桐竹先生、大変貴重なお話をありがとうございます。私も文楽と人形遣いについて具体的によく知ることができましたこと、感謝いたします。さて、今回、大阪大学と京阪電車のご厚意で、こういうすばらしい場所で「カフェ・アオキ」の座談会を開くことができまして、本当にうれしく思います。またこんなにたくさんの方にお越しいただき、驚くと同時に感激しています。コーヒー一杯も出さないのに「カフェ・アオキ」なんて何事かと叱られそうですが、「文化庁月報」という文化庁が発行している月刊の広報誌に掲載するための対談を「カフェ・アオキ」と称して、昨年の一月から、東京・霞が関にある文化庁一階の「ラウンジ」という公開の場所で、一般公開で実施してまいりました。

今回関西にまいりましたのは、関西元気文化圏という、以前から文化庁として取り組んできた「関西から文化を発信し、社会を元気にする」プロジェクトの一環として、本年三月の京都に引き続き、今回は大阪で開いたらどうかということで、このすばらしいスペースで開催させていただくこととなりました。

本日は、先ほど実演いただきました文楽人形遣いの桐竹勘十郎先生と、大阪大学総長の鷲田清一先生にお越しいただき、金水先生の総合司会でお話を進めてまいります。

わしだ・きよかず
昭和24年生まれ。平成19年から大阪大学総長。専門は哲学。『モードの迷宮』（サントリー学芸賞），『「聴く」ことの力』（桑原武夫学芸賞），『悲鳴をあげる身体』『思考のエシックス－反・方法主義論』『「待つ」ということ』ほか著作多数。

前置きはそれぐらいにいたしまして、大阪はもちろん日本屈指の商都であり、また文化都市ですね。今の文楽みたいな日本の誇るすばらしい伝統芸能がありますね。それから大衆芸能は有名ですし、すばらしい食都でもありますが、近年ちょっとあまりさえない感じがするところもあるような気がします。

関西から文化力ということで、以前大阪にいたこともある者としては、大阪文化のすばらしいところを、大阪以外の人にも知っていただきたいなと前から思っておりました。

国立文楽劇場も、亡くなった黒川紀章さんが設計されたすばらしい劇場で、大阪の日本橋にございますね。中に入りますと、非常に見やすく聞きやすい劇場で、良い設計だと思いますが、これもできてから二五周年を迎えました。

そんなわけで、今日は伝統的な芸能から、現代の文化、それからまた大阪という都市の文化と大学の関係などについてのお話をお聞きしたいと思います。

さて、いまこの壇上から見ていますと、客席の端のほうに、この「アートエリアB1（ビーワン）」を主宰されている平田オリザさんという、これも世界的な劇作家で演出家、そして阪大（大阪大学）教授であられる方がいらっしゃいますので、まことにぶしつけですみませんが、せっかくですからどうぞ壇上へあがって加わってくださいませんか。

（平田オリザさんが登壇）

引っ張り出しちゃってすいません。そんなわけで、今日は論客の方が多くいらっしゃいますので、さっそく皆様から存分にお話をしていただきたいと思います。

きりたけ・かんじゅうろう
昭和28年生まれ。昭和42年に文楽協会人形部研究生となる。三世吉田簑助に師事。父は人間国宝の人形遣い・二世桐竹勘十郎。平成15年に，三世桐竹勘十郎を襲名。平成20年に紫綬褒章受章，芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

ひらた・おりざ
昭和37年生まれ。劇作家・演出家。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授。『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。フランスを中心に世界各国で作品が上演・出版されており，演劇ワークショップの方法論は中国国語教科書にも採用された。

最初に、突然参加していただいたのにすみませんが平田先生におききします。平田先生は大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの講義で、ロボット工学を取り上げ、現代のロボット遣いの工学者の方と、桐竹勘十郎さんを講師にお招きしたとお聞きしましたが、それはどういうことだったのでしょうか。

平田　今、阪大のロボット工学は世界一で、浅田先生、石黒先生という世界的な権威がそろっています。あれは一年半前ぐらいだと思うんですけど、僕は三年前に阪大に呼ばれて来たんですけど、それでだいたいやることも落ち着いてきたので、鷲田総長から、平田さん、あと何やりたい？　と言われたので、ロボットと演劇をやりたいですと言ったら、もうそれすぐやりなさいと言われてですね。で、今、その石黒先生とロボットでの演劇を作っています。

去年、二〇分の試作品のロボット演劇を作ったんですが、まだ二〇分までしかできないんです。充電がもたないので。

そのプロジェクトのために学生たちがプログラミングをするのに、その所作をどうやって学べばいいかということで、桐竹さんに来ていただいたんです。

非常に印象に残っているのは、例えばコップを取ったりするのも、最初は大変だったわけです。特に紙コップなんかつるつるしている上につぶしちゃいますから。でも、もう取れるようになったんです、このロボットは。

でもロボットは、コップを取るという目的でしか取らないんですが、桐竹さんから教えていただいたのは、男性の人形はまあこうガバッと取るのだと。女性の人形はこう取ると女性らしくなるということを教えていただきました。ロボットはそこで相当進化しまして、おそらく来年以降ヨーロッパの演劇祭を、このロボットを携えて、阪大制作の演劇

がずっと回っていくことになると思うんですが、将来的には、僕は文楽の人形とロボットでぜひやりたいなと思っています。これは文化庁にたくさんお金を出していただきたいと思います。アニメーションもいいけど文楽もいいよみたいに。

桐竹 実際にやらせていただいて、僕、呼ばれたものの、ロボット相手に何を教えたらええのかなと思ったら、ロボット相手やないんですね。プログラミングをする人に教えるわけでございまして、さきほど実演しましたように人形を扱って、まずは人間のほうに解説をして、そしてロボットに覚えさすということで、非常におもしろかったですよ。それに、ロボットの頭がけっこう柔らかい動きをするんですね。だから非常に助かって。

で、あまり女形のロボットって見たことないんですけども、やはり演劇の中で女らしい役もあるやろうから、女らしい動きというのをできへんのかなということを、さっき平田先生がおっしゃったようにやったと思うんです。

お芝居では、うちの人形でもそうなんですけど、手が回り道をするんですね。回り道をすると非常にそれらしく見えるということを、ロボットの手を実際組ませて持って、無理やり動かして、こうするんだ言うてやったんですけども、割としなやかに動くんです。それがちゃんとプログラムできたらすばらしいものができるんちゃうかなと思って。

僕、実際に当日は拝見できませんでしたんですけども、なかなか将来有望やなと思って。さきほど冗談まじりに、どなたか人形遣い志望の若い方おられませんかと言うたんですけども、これから先、人形遣いがおらんようになったらロボットでもええんちゃうのという話を、実は楽屋では冗談半分でやっているんです。それぐらい日本のロボットの技術はすごいと。私もよくテレビで「ロボコン」ですか、好きで見ているんですけども、人形とも共通点がいっぱいありますし、非常に人間に近くなってきたと感じます。

青木 すごく興味深いお話です。阪大らしい。

そこで鷲田先生、私、二〇年間、阪大の教授をしていたんですが、一九七五年から九五年ぐらいまで。そのころ阪大といえば、物理や工学や医学、万事理系中心という時代で、文化人や哲学者が総長になるなんて夢にも思わなかった時代ですけども、いまや鷲田総長が出現された。大変うれしいし、期待しておりますが、今のお話を聞いて、総長はどう思われますか?

鷲田 阪大は毎年ノーベル賞のすぐそばまで行くので、私は発表の日はずっと大学に詰めているのですが、それがいつもあとひと息なんですよね。

研究だけではありません。この間は、工学部の学生でしたか、走り高跳びで日本一になりまして、アテネオリンピックに行けるかなというところだったんですが、日本一なんだけど、やっぱり国際標準には一五センチ足らなかったんですね。

それで、うちはいろんな企業とのおつきあいもあるので、靴のメーカーに一五センチのスニーカーを作ってもらったらあかんのと言ったら、そういう話じゃありませんといってすごく怒られました。

それで、今、狙っているのは、さっきのオリザさんの演劇なんです。ロボットという工学部の先生のロボット工学と、それからオリザさんの脚本・演出で、この間私も見せていただいたんですが、感情のプログラミングはされていないのに、実に叙情があるんですよね。あれで、アビニョン国際演劇祭に参加しようと燃えているんです。平田さん、いつになりますかね。

平田 早ければ来年からヨーロッパのフェスティバルを回り始めるので、五年以内には。

鷲田 学生がプログラミングとか全部やってくれているので、学生もものすごく燃えてくれていると思うんですが、楽しみにしております。

青木 文化で世界に輝く阪大ですね。文理両立でさらに充実した大学になると期待します。

（前編了／次号につづく）

●9月号予告

◆長官座談会◆
【文化の交差点】青木保文化庁長官座談会後編
鷲田清一　大阪大学総長
桐竹勘十郎　文楽人形遣い
平田オリザ　劇作家・演出家、大阪大学教授

◆特集◆
文化財建造物の防災
【寄稿】
新たな文化財防災のあり方
【文化庁提言】
近年の重要文化財（建造物）の防災対策
【有識者提言】
消防からみた文化財防災
歴史地区における文化財防災
海外における文化財防災
【施策紹介】
文化財を有する市街地の課題や施策
重要文化財建造物の防災対策の課題や施策
文化財防災のこれから

◆連載◆
【文化芸術へのいざない】
アニメーションの新しい展開
第六一回正倉院展
企画展「粱野夫妻陶芸コレクション―リーチ・濱田・豊藏・壽雪―」における新収蔵作品の紹介
【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】
目黒区美術館
【こどもの文化体験】
文化芸術による創造のまち支援事業
【祭り歳時記】
山中の安産祭
【文化交流使の活動報告】
平成21年度文化庁文化交流使指名書交付式
【どんなものかな著作権】
著作隣接権と著作権の保護期間

など

編集後記

文化財は国民共有の財産であり、そこには所在する地域固有の歴史と文化が包含されています。地域社会における身近な文化財について、その価値を見出し、その保存・活用をはかっていくことで、地域の活性化に寄与することが可能となります。

登録記念物の基準には、「地域の歴史の特徴を表しているもの」（遺跡関係）、「地域独特の自然物又は自然現象」（動物、植物及び地質鉱物関係）が掲げられています。登録記念物制度が普及することで、文化財の保護が一層はかられるとともに、地域住民が文化財を通してその地域の成り立ちや特質を理解し、地域アイデンティティの確立及びコミュニティーの創出への関わりを深めていく契機となることが期待されます。（KN）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは，

A　京都国立博物館
「京都十六本山の寺宝が一堂に！」
2組（ペア）

B　国立国際美術館
「やなぎみわ婆々娘々！」
2組（ペア）

C　国立新美術館
「光　松本陽子／野口里佳」
2組（ペア）

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ，8月27日(木)までにご投函ください(当日消印有効)。

＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報　8月号（通巻491）

平成21年8月25日印刷・発行

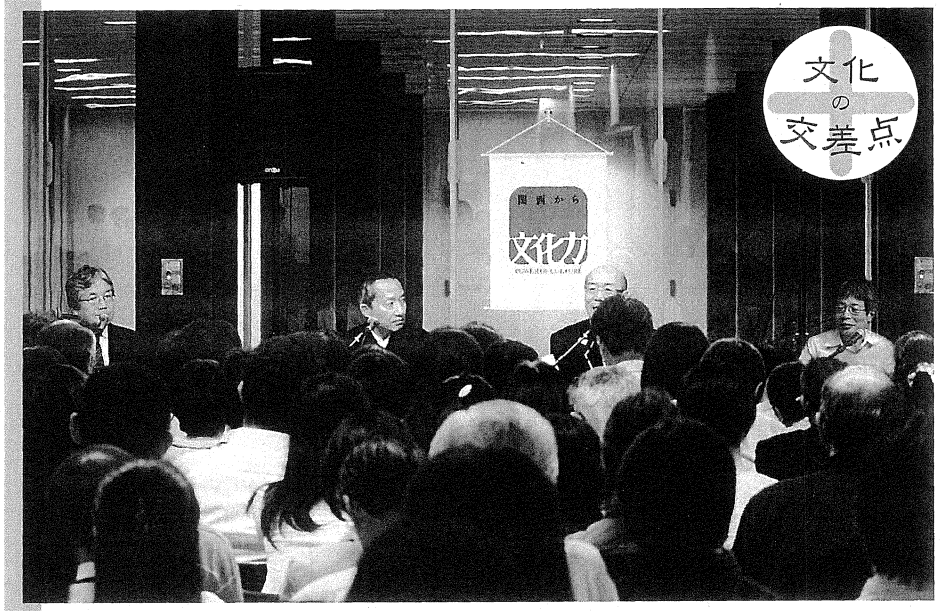
編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2
発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話　編集　03-6892-6536
販売　03-6892-6666
フリーコール　0120-953-431
URL：http://www.gyosei.co.jp
印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち，意見にわたる部分については，筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは，直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部首都圏課（広告）
電話 03-6892-6588（ダイヤルイン）
2009 Printed in Japan　ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。



青木 保・文化庁長官座談会

第25回（最終回）
●ゲスト
鷲田清一さん（大阪大学総長）　桐竹勘十郎さん（文楽人形遣い）　平田オリザさん（劇作家・演出家，大阪大学教授）
総合司会
金水　敏さん

カフェ・アオキ in 大阪

都市と文化

文化力で関西「から」「を」元気に

（後編）

文化庁月報

No.492
平成21年 9 月号

CONTENTS

文化庁長官就任挨拶……玉井日出夫　文化庁長官・3
文化の交差点　青木 保・文化庁長官座談会　第25回（最終回）　ゲスト 鷲田清一さん●大阪大学総長／桐竹勘十郎さん●文楽人形遣い／平田オリザさん●劇作家・演出家，大阪大学教授
カフェ・アオキ in 大阪　都市と文化　文化力で関西「から」「を」元気に（後編）……5

特集 文化財建造物の防災

寄稿
古都の文化遺産が地震火災の危機に瀕している……土岐憲三・12

文化庁提言
近年における重要文化財（建造物）の防災対策……大和　智・14

有識者提言
文化財建造物にも「防災計画書」を……関澤　愛・16
歴史地区における文化財防災……室崎益輝・19
海外における文化財防災……後藤　治・22

施策紹介
文化財建造物を有する市街地の課題と施策……国土交通省都市・地域整備局都市・地域安全課・25
文化財と活きるための消防庁の取組……消防庁予防課・26
文化財防災のこれから……文化財部伝統文化課・28

連載

鑑　文化芸術へのいざない　11・12・13
アニメーションの新しい展開（佐伯知紀）……30
御即位二〇年記念　第61回正倉院展（内藤　栄）……32
日本の陶芸史を飾る作家の逸品に出合う（唐澤昌宏）……34

いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート　90
目黒区美術館（東京都）……38

こどもの文化体験　30
足柄時代劇「富士に映える陽」（神奈川県開成町教育委員会）……39

祭り歳時記　伝承を支える人々　39
山中の安産祭（山梨県南都留郡山中湖村）……40

文化交流使の活動報告　58
平成21年度文化庁文化交流使指名書交付式……41

どんなものかな著作権　3
著作隣接権および保護期間……42

イベント案内●43
新国立劇場スポットライト●45
10月の国立劇場●46
芸術文化振興基金ニュース●47

今月の表紙

つばめ飛ぶ
撮影：岩崎　明

8月号より続く

人間「らしさ」をつくるもの

青木　さて、人間と人形のつながりについても興味深いお話がでてきましたが、また、動物やロボットとの関係についてどうとらえたらよいのでしょう。

鷲田　我々のしぐさのことを「振る舞い」といいますよね。これは様式化された「振り」と「舞」という言葉からできています。まだアイデアだけで自信はないのですが、今考えているのは、私たちのしぐさが振りと舞に様式化されるのではなくて、ひょっとしたら、振りとか舞という一つの様式を人間が作っていって、それをなぞる中で僕らの振る舞いが形づくられていったんじゃないかという、逆の考え方ができないかと思うんです。

　同じように、歌と言葉でも、人に何か伝える言葉があって、それがレベルアップして歌に、と考えますが、これも逆に、犬が天に向かっていななくように歌が最初にあって、そこから他人にメッセージを伝える言葉が出てきたんじゃないかなという、逆の考え方ができないかと思うんです。

　おもしろい心理学の実験がありまして、真っ暗な部屋に、真っ黒のタイツ姿で、顔も全部真っ黒にした人の関節に光の点をつけていくんです。それを見ると、真っ暗で、それが男の人か女の人か、お年寄りか若い人か、荷物を持っているのかどうかも見えなくて、その人が動き出すと光の点が動くだけなんです。なのに、その光の点を見ているだけで、どれぐらいの重さの荷物を持っているかとか、投げると何メートルぐらい飛んだかとか、その人がいる床がコンクリートかマットレスみたいなふわふわなのか、全部わかるそうなんですね。

　そう考えると、ロボットの動きとか、人形というのは、人間の体の要所要所の動きのパターンをきちんと形として組み合わせていったところに、人形とわかっていても、ものすごくスムーズに人の動きに見える秘密があるのかなと、そんなことを思い出しました。

桐竹　私たちも人形を遣うときは、いくら女っぽいしぐさをしても、味気ない言い方ですが分析していくと、それはかしらと肩と胴体と手との角度の組み合わせなんです。それをきちっとやっていたらそれらしく見えるんですよね。だから、その光の点だけ見ていたら男か女かわかるというのもよくわかります。

平田　もうまさにおっしゃるとおりで、コミュニケーションというのは型から入るわけですよね。これは学生によく説明するのですが、アメリカで有名な自閉症の動物学者の方がいて、この方は人とコミュニケーションをとることが苦手で、最初は人の感情がよくわからないんですね。感情の起伏とかが。

　ところが、IQが二〇〇ぐらいあって記憶力がものすごくいいわけです。彼女はどうしたかというと、人間のコミュニケーションを八〇〇ぐらいのパターンにして全部覚えたんですね。ある人がうれしいと言っていると、あ、この人は私がパンケーキを食べたのと同じ感覚をもっているんだな、という一対一対応で全部覚えている。その八〇〇ぐらいで、普通の生活は全部すんじゃうらしいんです。だから、普通の人が最初に会うと、その方が自閉症だというのはわからない。

　人間のコミュニケーションって基本的には本来はそういうもので、私たちは子どものときから、そういういろんな型で、コミュニケーションとか対人関係とか、私たちが体で表現している喜怒哀楽とかも、実は学んでいっているんです。

今回の座談会は，6月4日に文化力プロジェクト「関西元気文化圏」のトークイベント「カフェ・アオキ in 大阪」として行われたものです。「文化庁長官」の肩書等は開催時のものです。

鷲田　そうですね。ほんとうは女らしさというのも自然じゃなくて、そういう型とかしるしだと思うんですね。

桐竹　鷲田先生がおっしゃったように、人形を遣うとやっぱり、男ですから男の役は自然に遣えるんでしょうけども、女の役の場合は、師匠からの教えや先輩の教えもあるんですけども、自分でも工夫を重ね重ねしているんです。

　しかし、出てくる登場人物にはいろんな女性がいますので、その女性に見えるだろうかと大変苦心します。実際の普段の生活でも、師匠からは、よう女の人が歩いているのを見ときやとか、着物を着て色っぽい人がおったら、かめへんから見とき、と言われるんですけども、いろいろな人を観察して、それ以上のものを作る。

　でも、僕の場合、すいません、女性の方には申しわけないんですけども、そうなると悪いところが見えるんですよね。わあ、すばらしい、もうこれ以上の女の人はいないとか、色気があるとかいう人は、割と少ないんですね。悪いところばかりが見えてきて、あ、あそこあかんな、あんなことしてたら、あの角度ではあかんわとかいうので、どんどんと身に付けていくんです。より女性らしくというのを追求しながら、さっき言った角度の組み合わせをいつも勉強してます。

　人形遣いは足遣いから勉強しますが、足遣いはぴったり主遣いの左側にいてるわけですね。一体になれます。人形と主遣いと足遣いとが一体になっていつも動いているので、息づかい、主遣いが呼吸をするのも全部伝わってくるんです。

　ですから、師匠の舞台だと、ここで師匠が今息を止めてるなというのはわかるんです。師匠が止めてるとこっちも息ができなくて、たいへん苦しいです。そのタイミングがわからないと死んでしまいますので（笑）、ほんとうに息をトゥっと止められた瞬間に、足遣いも同じように息をちゃんと止められるようになったら、主遣いの邪魔にならないんですね。変なところで呼吸していると、全部それが主遣いに伝わって、邪魔になるんですね。

　だから、そういう息づかいも、しぐさも含めて、女性の「らしさ」をいつも僕らは考えているんです。

青木　保長官

都市と文化

青木　今のお話をお聞きしていますと、人形遣いの世界は奥が深いというのか、人間の本質に迫るような部分が感じられます。また、伝統芸能のもつすばらしさがいきいきと感じられます。人形遣いは足遣いからとして、主遣いとのつながりとなると本当に人間存在の機微に触れる気がします。

　でも実際、現実に戻って文楽劇場にどれだけの人が行っているかというと、必ずしも満足できるものではないのも事実でしょう。そこでこの伝統的・古典的な芸能の存在と、今の大阪の発展とをどういうふうに見ていらっしゃいますか。

桐竹　大阪に立派な国立の文楽劇場があるんですけども、文楽は江戸時代からずっと本拠地を大阪に置いていることを、これは自慢してええと思うんです。大阪で生まれて、大阪で愛されて、大阪で育った文楽でございますので。でも今、長官がおっしゃったように、あまり客席は元気はないんです。

　これはほんとうに私たちが頑張らんといかんのですけども、しかし、どんどんどんどんまわりの社会が変わってきて、生活様式も、考え方も、娯楽も変わりました。私が文楽に入ったのは昭和四一年ですけども、それ以降、文楽だけやなし、上方の歌舞伎も、演劇なんかも、劇場に足を運ぶお客さんの数がか

なり落ちた時期がございまして、これはもうテレビ、映画、その他いろんな娯楽が出てきて、どんどんと押されてしまった。

今は今で、家を一歩も出ないで、買い物はできる、映画は見られる、何でもできるわけです。電車に乗ってちょっと文楽劇場まで行こうかと、家から出てもらうようなことを、私たちはどういう努力をしていったらええか、どうしたらお客さんに足を運んでいただけるか、非常に難しい課題で、頭を悩ましています。

平田　文楽にしろ歌舞伎にしろすごいことは、もう一七世紀ぐらいからお客さんがチケットを買って、お金を出して劇場に見に行くというシステムがあることです。これが成立しているのは、当時は江戸と大阪と、あとパリでちょうどコメディ・フランセーズができたころですから、もういくつかなんですよね。

例えばドイツなんかは、まだそのころは皇帝がオペラをつくってタダで見せていたわけで、そのころの演劇とか芸能というのは基本的にタダで見せたり、お祭りでやったり、あと神社仏閣の客寄せですよね。ご開帳でありがたい仏像でもあればいいんですけど、たいていのお寺にはないですから、それで客寄せでお芝居やって、それで人が来て、そうすると縁日がにぎわいますよね。寺銭というのは、元々お寺が取っていたお金です。

だから都市が成立しないと、芸能が芸術にならないんですけど、文楽・歌舞伎というのはほんとうに非常に早い時点で、都市の芸術として成立していたのですね。

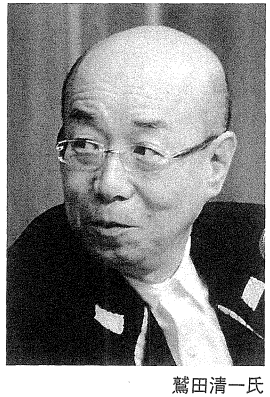
しかし、逆にチケットを買って劇場へ見にいくというシステムは、おそらくもう二〇～三〇年で崩れると思うんです。もう無理なので、別の方法で、私たちは生の芸術を保っていかなきゃいけない。

例えば、たくさんの方がスポーツジムに行かれますよね。あれ、よく考えると変じゃないですか。普通に歩けばいいのに、なぜか機械で歩いたり、健康を保つために必要ということでスポーツジムに行くのが習慣になっている。演劇もそういうかたちになるんだと思うんですよ。

だから会社帰りに、文楽を見たり演劇を見たりする。それは一回一回お金を払うものではなくて、会員制で好きなときに行けるとか、健康診断みたいに、半年に一回は必ず行きなさいみたいになる。それ以外にたぶん、生の芸術が生き残っていく道はないと思っているんです。

鷲田　二〇年ぐらい前に、ある自治体から、それぞれの街の文化度を何で測ったらいいのかという調査を委託されました。

で、誰もが考えるのが、重要文化財や劇場がいくつあるかとかいうことですけど、私はちょっと変化球でやろうと思って、その中の一つの重要な調査項目に、習い事をどれだけやっているか、例えばお習字からはじまって、仕舞とか謡とか短歌とか、そういう観点で調べました。


鷲田清一氏

すると日本に三つ、圧倒的に習いものをやっているところがあって、一位が金沢だったんです。で、二位、三位が京都、大阪です。上方なんです。それ以外のところはすとーんと落ちるんですね、人口に対して習い事をしている人数が。

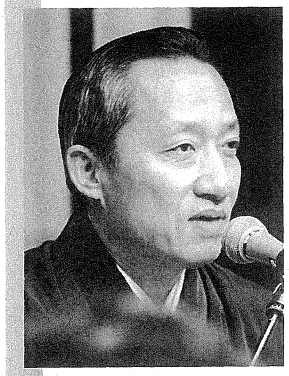
型とか物語というのはうつるじゃないですか。例えば、歌舞伎を見ていて、悲恋の物語だったらうわーって泣いてしまいますし、しぐさも、今日の文楽人形の動きを見てるだけでちょっとうつってくるんですね、その手の反りとかが。

昔、北海道に石原裕次郎の記念館ができたときも、みんな普通に入っていくんですけど、出てくるときにはみんな外股になって、ボタンが一つ外れてる（笑）。なんかうつるんですよね。

だからやっぱり、劇場で見るという以前に、舞とかがものすごく身近にあった。で、自分の振る舞いとも通じていた、というところがあると思うんですよね。

着物を着るというのも、おばあちゃん、お母さん、娘さんと三代いれば、別に大層にじゃなしに、おばあちゃんがお母さんに着せてきたのを、今度はお母さんが娘に教える。そのときおばあちゃんが手伝ったり、こうするねんとか教えるので、なにも教室にいかなくても、当たり前のように着付けなんて簡単なんだという伝承があったと思うんです。それが、先ほどの、歩けばいいのにスポーツジムに行くのといっしょで、着物も着付け教室に行って知識として覚えるという、なんかすごく変な迂回路を通っていると思うんですね。

だから、僕はそういう伝統芸能や芸術がシアター化してきて、鑑賞するというような距離感ができたのは、やっぱり、習い事をしないとか、家で着物の着方を伝えるということが成り立たなくなったとかいう、そういう家族や地域の文化の問題と実はものすごく深くかかわっているんじゃないかなという感じがします。


桐竹勘十郎氏

桐竹　「上方芸能」という長い歴史のある雑誌があるんですが、この間、記念の特集号があって、木津川計さんという先生が書かれた序文に、都市の力っていうのは何やろうということが書いてありました。これは、経済の発展が都市力になるのだけれども、それだけではあかんと。都市格というのが必要だと。文化をどれぐらいだいじにしているか、これが都市の格やということで、ものすごいええことが書いてあるなと思うんです。なかなか現実は難しいんでしょうけども、その都市力と都市格を、大阪がもう一度両方の力をつけてほしい。私たちももちろん頑張りますけども、お客さんなしのところでは私たちは何もやる意味がないわけで、そういうお客さんが増え、また演じるほうも増え、それをまた支える人たちも増えて、都市力と都市格のがっちりとした大阪にしていきたいと思います。

鷲田　都市というのは、要するによそからいっぱい人が来て住み着いたところだと思うんですね。だから、上方文化というのが、ものすごくディープでぶ厚いというのは、大阪には蔵屋敷があって、全国から武士とともに各藩の人がやってきたし、それから近畿の近隣の人がやってきた。私も関西人といったってまだせいぜい三代目で、祖父は北陸から来た人だし、そういういろんな人が全国から来ることによって、やっぱり価値観とか美的感覚も基軸とぶれがいわば同時に生まれてゆくんですね。

そんな中で、あ、こんなのしょうがないとか、いやこれがいいんやと、切磋琢磨している間に、批評の水準がだんだん上がっていって、だから大阪はみんなの目が肥えてるし、中途半端なことはできないな、となってくるんですよね。

今も、その痕跡はあると思うんですが、やっぱり今の上方は、京都も大阪も文化力がちょっと落ちている。なんか大阪人という一色にだんだんなってきているんじゃないかという感じがするんですね。大阪という価値が一色になって、ただ口の悪いところだけ。それがもう少し昔の都会みたいにもう一度いろんな軸が沸騰すればいいなというふうに思いますけどね。

大学と都市

青木　伝統芸能のよさみたいなものも、今日のように実際桐竹さんにお越しいただいて実技も見せていただくと、その文化的な仕組みがよくわかってきて、しかもいろんなそれにまつわるお話をお聞きして、その中に潜むものもある程度感じられてくる。このような情報はゆっくり伝わる情報で、なかなかテレビ

などマスコミは時間を割いてくれませんが、そういう遅い情報をだいじにすることがいま大変必要だと思います。

遅い情報を、一般の、普通あまり関心がない人にも伝えていく上で、やはり大学の役割があると思うんですよ。

大阪は、大阪市内から大学をみんな追い出しちゃったでしょう。これがいうならば大阪の凋落（ちょうらく）の始まりだとも思っているんです。学生たちが街中にいるということは、やっぱり都市にとって非常に重要なことだと思うんですね。つまり、たくさんのお金を使って物を買ったりして消費するわけでも何でもないんですが、いつも何となく町を賑わしている学生たちがいることによって、若さと希望の現われでもある彼らの存在によって、都市が気持の上でも賑わいの面でも活性化するということもあるし、その中から出てくる周囲の創造的な雰囲気によって、今日のお話にでた文楽とロボット工学をいっしょにやろうというようなことにもつながるのだと思います。

鷲田　もし大阪大学が中之島のど真ん中にあって、福島のそばにあったり、堂島のそばにあったりしたら、町の人が学生を鍛えてくれるんです。お金がないときの物の食べ方、どんな顔してどう甘えたら食べさせてもらえるかとか、あるいは本でも、今日お金ないんやったら次でもいいって、ツケの仕方とか、出世払いとかを習って鍛えられるわけですよね。でも今、吹田、豊中というかなり郊外の住宅街の間にありまして、学生はそういう一般の地域の人に鍛えられるという経験を全然していない。

平田オリザ氏

そこで考えたのが、大阪大学の、農学部以外ありとあらゆる学問を学ぶ学生がいていっしょにできることで、別に特別な知識がなくてもできるトレーニングって何かというと、ここでいつもやっているアート、ダンスであるとか、音楽会であるとか、講演会でもいいし、何か文化のイベントをやるときに、最初から、それを企画するところから、プロのやっているお仕事のお手伝いをさせようと。

そして、そういうイベントをやるためには保険もかけないといけないし、ひょっとしたらこういう空間だったら消防署の許可もいる。もちろん俳優さんの時間の振り方もあるし、受付もしないといけない。それから、最後に収支決算して、打ち上げの会もしますよね。そういうことまで含めて、何かイベントの最初から最後までを、学生を巻き込んで経験させてやりたいんですね。これは工学をやっていても法律をやっていても、アートだったらすぐ参加できる。

青木　アメリカの大学の例ですが、MIT（アメリカ・マサチューセッツ工科大学）は、どんな専攻の理科系の学生にも、芸術を必修科目にして、理論じゃなくて、例えばデッサンをさせるとか、ジャズのピアノを演奏させるとか、あるいは演劇の稽古をさせるとか、そういう実技をさせるというんですね。日本から秀才が行って、いちばん困るのはそれだと言っていました。

理系世界ナンバーワンの大学がそういうことをやって、芸術のもつ創造性を生かしてクリエイティブな力を養成しようとしている。だから、文化芸術教育を大学教育の中にちゃんと取り込まなくちゃいけないと思うんですよ。

鷲田　ちょうどおっしゃっていただいたことが、まさに平田さんのいる大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの役目です。普通は、昔でいう教養教育としてアートをもってきて、広く勉強してからだんだん専門に行くイメージがあるんですが、阪大は逆のことを始めています。つまり、専門を究めるために大学院に行き、さらに博士号を取るような人ほど、教養をだいじに教えることが必要ということで、センターには大学院の共通教育をやっていただいているんですよね。

研究は今、細分化がいっそう進み、専門というともうほんとうに狭い、重箱の隅をつつくようなことをしている。ところが実際に彼らが社会に出て何かしようと思うと、実は一人で何もできないんですよね。別の専門の人、例えば何か技術開発しても、それを宣伝してくれるプロと組まないとうまくいかないし、それをプレゼンするときは、アーティスティックに人の心をぎゅっとつかむ表現のプロと組まないといけない。

つまり、専門と関係のないほかのプロと組まないと、ほんとうは専門家って何もできないんです。全然違うほかのプロの人、つまり自分の専門については完全なアマチュアの人に、自分がやっていることのこのおもしろさというのをきっちり伝えられる、そういう表現法、あるいは感受性というのをもたないといけない。そういう教育が博士課程に行っている人にこそ必要になると思っています。

平田　昨年からいよいよ大学院生が演劇をつくるという授業が始まりまして、これはなかなかいいんです。半年かけて修士・博士課程の学生たちがつくるんですが、例えば看護の学生たちは、主婦の方が自分のお母さんが認知症で介護をしてるんだけど、自分が乳がんになってしまって、そのことをどうやって家族に話すか？　というのをお芝居にしたんですね。

終わったあとに看護の学生たちが言っていたのは、自分たちも今大学院でロールプレイといってやるんだけれども、それは、たいていが医者が、あるいは看護師がどうやって患者さんにがんの告知をするかということだと。それで患者の立場を知ったつもりになっていたと。

でも、患者さんが、自分の家族にどう伝えるかなんて考えたこともなかったと。それで、半年間ずっと考え続けてたんですね、彼女たちはお芝居をつくる過程で。

ほんとうに誇れることだと思いますけど、大学院で一般の学生がアートを体験できるということに関しては、阪大が今、日本の中では最先端を行っているので、ぜひこれはほかの大学でも広めていっていただければなと思っています。

青木　それでは、せっかくですので、フロアーから何かご質問はございますか。

会場から　桐竹さんにお聞きしますが、いろいろな伝統芸能の方が、若い世代を対象に、小・中学校を巡回して実演しておられます。文楽も負けてはだめだと思う。出前して、もっと若い人が、少ない費用で見られるようにしないと。地域が文楽を守るようにしていかないと、昔、大阪に文楽があったんやなぁ、ということになってしまうので。

桐竹　ずいぶんあちらこちら個人的に頼まれて行きましたり、また、NPO法人も作っておりまして、そこで小学校などにも依頼があればなるべく出かけるようにしてます。公演の合間にしか行けないんですけども、なるべく小さい子どもにも見てもらおうということは、少しずつですけども、やっております。

子どもというのはほんとうにまだ色で染まっていないときに、見たり聞いたりしたものは残るんですよね。ずっと。

私の親父の先代の勘十郎も言うてました。なるべく小さいころに、小さい子に見せないかん。昔はおじいちゃん、おばあちゃんに手を引かれて、なんとなくわけわからんでも見に行ったり聞いていたものなんですけども、もう今はそういう時代やないので、やっぱり自分から回って、出かけていって見せるようにせないかん、ということを言うてました。

高校生のための文楽教室があるんですよ。小・中学校は、文化庁の事業で行ったりします。でも、大学生のための文楽というのはないんですね。だから、学校でやらせてもらってもいいですし、こういう場所でやらせてもらってもいいし、ぜひ大学生の方にも見ていただきたいと思います。

青木　鷲田先生、桐竹先生、平田先生、本日は大変すばらしい、そして貴重なお話をありがとうございました。

金氷　どうもありがとうございました。それではこれで、「ラボカフェ」スペシャルバージョン「カフェ・アオキ in 大阪」を閉じたいと思います。

●10月号予告

◆特集◆

「平成20年度国語に関する世論調査」に見る日本人の国語意識

【文化庁提言】
「国語に関する世論調査」の意義

【座談会】
日本語は大切にされている？

【調査結果の概要】
平成20年度「国語に関する世論調査」の結果

◆連載◆

【鑑 文化芸術へのいざない】
青森県風張一遺跡出土の合掌土偶
トピック展示「新収品展」の紹介（九州国立博物館）
初心者に向けた歌舞伎鑑賞ガイド（国立劇場）

【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】
浦安市郷土博物館

【こどもの文化体験】
ふじのくに 高まる広がる 文化の波

【日本の伝統美と技を守る人々】
木工芸・大坂弘道

【文化交流使の活動報告】
木工芸作家・須田賢司

【伝建地区を見守る人々】
能登黒島天領祭（輪島市）

など

◆文化庁ニュース◆
文化広報大使事業の取組
文化庁長官表彰（文化発信部門）

など

＜お詫びと訂正＞

本誌平成21年8月号記事中に以下の誤りがございましたので訂正いたします。

●文化庁ニュース 42頁
本文3段目24行目
（誤）このようは
（正）このような

読者の皆様、並びに関係各位にはたいへんご迷惑をおかけいたしました。深くお詫び申し上げます。

編集後記

今月号では、文化財建造物の防災の現状と課題に焦点をあてて特集を組みました。

近年、大雨・暴風等の自然災害による文化財建造物の損傷、放火などの不審火による文化財建造物の焼失といった被害の事例が増加する傾向にあります。また、大規模地震等による文化財建造物への甚大な被害が予測されていることについて、マスメディア等を通じてご覧になられた方も多いかと思います。

文化財は、長い歴史の中で生まれ、育まれ、守り伝えられてきた国民の貴重な財産です。文化財のよりよい保存・活用のために、文化財建造物の防災・防犯対策をさらに充実させていくことは、今後我が国においていっそうの取組が期待される分野の一つといえるでしょう。（S・K）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは，
A　京都国立近代美術館
「ボルゲーゼ美術館展」5組（ペア）
です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ，9月28日（月）までにご投函ください（当日消印有効）。

＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報　9月号（通巻492）

平成21年9月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2

発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話　編集　03-6892-6536
販売　03-6892-6666
フリーコール　0120-953-431
URL：http://www.gyosei.co.jp

印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち，意見にわたる部分については，筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは，直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部首都圏課（広告）
電話03-6892-6588（ダイヤルイン）
2009 Printed in Japan　ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。